

今年の8月も「東京新聞」は「平和の俳句」を掲載している。毎朝、平和を求める人々の句を読み、考えさせられた。俳句は季語を織り込んだ花鳥風月の一断面を切り取った文学と置いていたが、「平和の俳句」は季語なしで、平和への思いを自由に詠む句で、思想性を取り入れ、俳句の奥行きが広がったのではないか。「平和の俳句」は、戦後70年の2015年に、提唱者の金子兜太氏といとうせいこう氏が選者になって始まった。金子氏はトラック島で戦い、戦後、復員船で帰国した時「水脈の果て炎天の墓碑を置いて去る」と詠んだ俳人で、俳句界を牽引した人である。金子氏が高齢になり、黒田杏子氏が選者になった。2018年から「平和の俳句」は、毎年敗戦月の8月に掲載されるようになった。黒田氏が亡くなられ、今回から、夏井いつき氏が選者になり、いとうせいこう氏と二人で選考している。夏井氏は、テレビ「プレバト!!」で、出演者たちの俳句をユーモアたっぷりに採点している。夏井氏の一言の添削で、句が全く変わることに驚かされている。今年の「平和の俳句」は、ロシアのウクライナ侵略戦争の悲惨な報道を否応なく見せられているので、反戦への思いは高まり、例年より、多くの句が寄せられたという。心に残った句を紹介し、私の感想も書きたい。

・「右腕を沖縄に置き卒寿かな 安藤早苗（74）愛知県安城市」安藤さんの父親は沖縄戦で右腕を失くし、体に銃弾痕もあったという。だが、命長らえたから、作者の生に受け継がれた。戦争は人間が起こすのである。ならば、戦争を起こさないこともできるはずである。人間は、命を受け継ぎ、平和を作り出す言葉と知性を持っていることを信じたい。

・「黒い影アイス片手の六日かな 渋谷晴（15）東京都大田区」冷たいアイスを食べる自分の影が、原爆の灼熱で石段に焼き付けられた黒い影を思い起こすと詠っている。15歳の少年の感覚とは思えないほど鋭い。石段に焼き付けられた黒い影の写真を見た時、大きな衝撃を受けた。同じように受け止める少年がいることは、平和への希望となる。

・「人類の滅びぬための原爆忌 浅岡孝夫（81）愛知県豊橋市」広島で行われたサミットでは、核廃絶を言いながら、核依存を正当化するような話し合いであった。松井一実広島市長は、核抑止論は破綻していることを直視し、為政者に核抑止論から脱却を促すことが重要になっていると訴えている。ロシアのウクライナ侵略戦争は、ロシアの核を恐れ、ウクライナからロシア軍を撤退させる戦いに限定されている。この非対称の戦争は、核の力を認めていることで、核保有を模索する国が増えていくのではないかという疑念を持つ。

・「家系図に爆死とありぬ祖母と叔父 柳原真江（63）横浜市栄区」私の友人は三姉妹の末妹と結婚した。三姉妹は、母の両手に握られ、背中におぶわれ、被爆地から逃げ、命を得たが、三姉妹とも皆、原爆の後遺症と思われる同じ病気で亡くなり、原爆死没者名簿に記されて、慰霊碑の石室に納められている。原爆は何と残酷な兵器であろうか。断じて、使用させてはならない。友人は、広島で長く、伝道、牧会をされた。

・「辱かしめ受けたら飲めと渡されし粉 古谷昌（93）東京都江戸川区」学徒動員で働いていた15歳の古谷さんに、職場の主任から「辱めを受けることがあったら、飲め」と新聞紙の包みを渡された。粉は青酸カリである。辱めが何かも分からなかったと言う。日中戦争で南京を攻略した時、日本兵による虐殺と強姦が横行した。戦争に負けた時は、このようにされるということが、国内で言われるようになったことが背景にある。戦争は、人を狂気にする、また、狂気でなければ、人殺しの戦争はできないのではないか。